町民参加の町史づくり

竹富町史だより

1994.3.31(木)
第５号

竹富町史編集室
沖縄県石垣市字大川10番地
TEL･FAX兼用 (09808) 2－9985

目次

写真集「ぱいぬしまじま」特別賞……(1)
第七回町史編集委員会……(2)
第二回写真にみる竹富町のあゆみ展……(3)
波照間島と紅頭嶼……(4)
小城　盛……(10)
浦内川の渡し船……(11)
八重山分村問題……(12)
小浜島の唐人墓碑……(13)
県地域史協議会研修会……(14)
竹富町史第十二巻資料編　戦争体験記録の編集理念……(15)
戦災実態調査記入要領……(16)
竹富町戦災実態調査票（記入例）……(18)
戦時・戦後体験記録の募集要項……(19)
受贈図書紹介……(20)
購入図書紹介……(22)
業務日誌……(24)
編集後記……(26)

表紙の写真

小浜島には昭和30年代に小浜幼児園があった。それは今風にいうと保育園、保育所と幼稚園とを合体させたようなもので、公民館運営だった。地域が子供たちの教育に取り組み、学校教育と社会教育が一体化していた。（写真提供・松原浩さん）

☆題字　大　城　正　明

出版文化賞を受賞した皆さん（前列右端が安里室長）

沖縄タイムス
出版文化賞

写真集『ぱいぬしまじま』

―特別賞を受賞―

竹富町の写真資料を収録した写真集『ぱいぬしまじま―写真にみる竹富町のあゆみ―』が、第十四回沖縄タイムス出版文化賞の特別賞を受賞しました。贈呈式は昨年十二月二十一日夕、沖縄タイムスホールで行なわれ、安里碩八室長に賞状と賞牌が新川明社長から手渡されました。

同賞は、沖縄における出版文化の向上と出版活動の振興を図るため、沖縄にかかわる一般刊行物の中から優れた図書を選んで著作ならび出版元を表彰しよう、と設けられたもので正賞と特別賞の二種類があります。今回、選考対象に挙がったのは二百五十一点で正賞三点、特別賞一点が受賞となりました。

写真集は表紙に手書きのイリオモテヤマネコを描き、バックには多島から成る竹富町の島じまをイメージ化した装幀にしました。写真構成は島ごと単位に村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、祭祀・芸能の五本柱を立て古き時代の村々の様子や人びとの暮らしを描き上げることに工夫しました。写真集は出版文化に貢献する、としたことが認められました。

贈呈式で新川社長が「受賞を機会に精進を重ね、今後も沖縄の出版文化にお力添えをいただきたい」とあいさつしました。このあと祝賀会に移り、受賞者のスピーチ等があり出席者同士お互いに懇親を深め、盛り上がりました。

第七回町史編集委員会

―「新聞集成」編集方法を決定―

第七回竹富町史編集委員会が昨年十一月四日、町史編集室会議室で開かれ「新聞集成」及び「戦争体験記録」の編集について審議を重ねました。「新聞集成」に関しては記事の配置、構成さらに印刷仕様を中心に審議をし「戦争体験記録」については調査方法等の説明を行い、話し合いました。

「新聞集成」等について審議した編集委員会

編集委員会の席上、當山哲男委員長が「写真集が発刊できたことに感謝します。今回、新聞集成の編集を中心に審議をしてもらいたいと思います」とあいさつしました。引き続き「新聞集成」の編集方法について審議が行なわれました。

「新聞集成」は「竹富町史第十一巻資料編　新聞集成Ⅰ」として今年度に発刊する計画です。その後、「昭和戦前期」「昭和戦後期」と年次別に順次、刊行していきます。

「新聞集成Ⅰ」は「琉球新報」（明治三十一年～大正七年）、「沖縄毎日新聞」（明治四十二年～大正三年）の二紙を扱い、期間は明治三十一年から大正七年までとなります。収録記事件数は「琉球新報」が七百五十四件、「沖縄毎日新聞」は五十八件の合計八百十二件の掲載となります。記事は政治、経済、教育、文化等と事象別に分類せず編年方式（年月日順）で配置します。

「新聞集成」の構成は巻頭に明治・大正期の写真を口絵として用い、発刊のことば（友利哲雄町長）、あいさつ（當山哲男委員長）、凡例、目次、収録記事目次を配します。本論は最初に総説がありここで沖縄の新聞史、新聞の特徴、社会状況等を新聞によって語らしめます。続いて編年体で記事を並べます。その中に五年単位で年次解説を入れ明治、大正期の沖縄、八重山、竹富町の政治、経済、社会状況を説き、読者の便宜に供します。

巻末には竹富町関係不採用記事目録、明治・大正期の新聞にみる竹富町の略年表、索引、編集後記、町史委員会委員等を盛り込みます。総ページ数は九百ページ前後に押さえます。発行部数は一千部とします。表紙は布クロス丸背、濃紺、町章（空押し）、背文字（金箔押し）となります。

「戦争体験記録」は「竹富町史第十二巻資料編」として平成七年に発刊する計画です。

好評を博した写真展

第二回写真にみる竹富町のあゆみ展

―第三回ぱいぬ島まつりで好評―

「潤いの町、活力の町、今きらめく未来へ」をテーマに掲げ「第三回ぱいぬ島まつり」が昨年九月十八、十九日の両日、町離島振興総合センターで開かれました。町史編集室では町史コーナーを設け「第二回写真にみる竹富町のあゆみ展」を催して好評を博しました。参観者は写真を一点一点、じっくりと眺め古き時代を確かめ合いました。

写真展は、写真集『ぱいぬしまじま―写真にみる竹富町のあゆみ―』の発刊に向けて収集した一万三千点余の写真の中から九十四点を精選して展示しました。写真には歴史、文化、人生のドラマやロマンが映し出され、見る人に感動を与えました。自然環境、村落の中には現在とは様変わりしたものもあり、歴史の移り変わりを視覚で確認することができました。

写真は、どれも貴重な歴史資料で小浜島の帆立てサバニ、八重山鰹節製造工場、由布島から西表へ農作業のため行く水牛車、竹富島のニーラン石で祈りを捧げる神司、宇多良炭鉱の全景などが見る人に時代の移り変わりを語り掛けました。展示物は写真パネルのほか、発刊した写真集も置き人気を集めました。参観者はページをめくり、お互いに談笑し合う光景が見られました。

写真展は盛況を極めました。参観者の中には古き時代のわが家を見つけ、感慨にふける人も見られました。

《新聞資料紹介》

波照間島と紅頭嶼

赤嶺江峰

爰に掲記するものは台湾東部海上の紅頭嶼は琉球国にて南波照間島と伝唱し来りし島嶼の別名にあらざるなき乎。否やを試みんが為め沖縄県下八重山列島中波照間島民の一部が往古に於て南波照間島に遁走したる昔日譚を誌さんとす。元琉球国は支那の古昔随朝の頃より貿易交通の開始ありたるが如く随って逐年支那との交通頻繁なると共に航海中台風巨涛の災変に遭逢するもの至って多く近きは台湾東部方面より遠くは南洋諸島へ漂流したる伝説尠からず。されど之等の伝説は爰に贅言するの必要なきを以て余は単に紅頭嶼と南波照間なるものの異同如何を詮穿せんが為めに波照間島の怪偉人赤蜂の動乱より同島民が遁走したる由来を標記し識者の参考に資せんとす。

◇波照間諸島

沖縄県下八重山列島の最西端与那国島と三角形をなせる中間、南方に孤懸せる最爾なる一小嶼がある。波照間島と称し台南の南海上紅頭嶼、火焼嶼の彼方東南の洋中に孤立する島であるとしてある。西の一点は即ち与那国島では宜蘭の東北海上に介在す。此等の諸島は東部台湾とは一衣帯水を隔て呼べば当に応へんとする位置に点□せるを以て晴天碧空こ日和には台湾の中央山脈は遙か海波照天の間に望見せらるると云ふことである。又海波静なる暁には基隆の彭佳嶼より与那国島の鶏鳴を微かに聞かるるさうだが三、四年前よりは与那国島と基隆間とは戎克船で往来しているし、如斯接邇の位置に存在するあり。又一方往古以来支那へ航海中変災に遭逢し狂瀾怒涛に翻弄泛輾して漂流者屢々ありしことは近き例に於ける彼の恒春牡丹社蕃害等より今尚ほ漂着者が絶えざるに徴するも其古より台湾付近と関係浅からざることを窺知するに難からぬ。

去る明治三十九年の頃であった。琉球人民が古来より称呼し来りたる波照間島と其妹島処謂南波照間島は台湾の紅頭嶼と火焼島であろうといふので其探検の為め沖縄県技手某等両名某艦に搭乗して来たが其筋に於ても未探の土地であったから上陸出来ず余儀なく逆戻を喰ったと派遣員の某が余に語った。併し其以前にも汽船大有丸を廻航して該島を探検しやうと出掛けたが悉く其目的を遂行し得なかったと云ふていた。此南波照間と云ふ妹島は旧琉球蕃庁置県此法台湾占領当時迄は単に島の名称が附いて居るのみで、其実治外の島地、為政者が未だ一歩も足を印せざる未到地で、唯名義丈けの属島であった。要するに南波照間てふ島は朦朧たる間喚起されて曖昧模糊たる裏に没却され該島なるものの形骸すら今尚ほ五里霧中に彷徨して不明である。

波照間島の古来は現今八重山島庁の行政管轄下にあるが如く旧藩庁時代も八重山本島に直属しいたので其関係書類は八重山役場にあった。但し従来の旧記は乾隆六十年の卯年三月十日と云ふ日に八重山本島に海嘯湧起し同島の七、八分通り

は席捲し去られたる為旧来の古器物旧記其他史蹟の証左となるべきものは過半流失し大約由来記のみ伝はって居るさうである。

◇波照間赤蜂の野心

波照間島は周囲五六里内村、外村の二箇村よりなる小島であるが、赤蜂と云ふ怪偉人は何年の頃同島に顕出したのか権威並び行ひ声名全島を震動し島民悉く其指揮の下に服従したのである。於此乎赤蜂は恰も王者の位置にある想をなし、全島民を操縦することが出来たので終には命を下し八重山島を経て琉球藩庁へ貢ぐべき租税上納を悉く止めさせ規定の税額を減免して尚ほ民心の収攬に心力を注いだのである。赤蜂は之ればかりではなく八重山本島に羽翼を伸ばし延いて琉球全島を蠶食し、最終には琉球政庁を転覆破滅して己れ其王位に登り琉球を統一しやうとの野心を勃発したのである。恁る野心を包蔵せる赤蜂は先づ第一着手として八重山島に渡航し、現今庁の所在地を距る一里有余の海岸大浜村に潜伏し同島の形態如何を覗った。一説には赤蜂は船で渡ったのではなくて徒歩で八重山島に着いたと云ふ話しもあるが、或は現時のやうな散布点在せる島嶼ではなくて、往古は八重山本土と陸続きであったと云ふ地理学的消息を竊に語って居るかの感想が起こるのである。

◇八重山島主と赤蜂の葛藤

容貌怪偉骨格逞しい波照間の赤蜂が突然八重山島海浜の一角大浜村に出顕し起居啻ならぬ動作に、一同眉を顰め怪訝に思うて居ると、いつしか大浜ん赤蜂反旗を挙げ八重山島主を討滅し同土を横領する悪計を企てたと云ふ噂の焔が立ち騰った。すると赤蜂が本土を□□瞻望し居ることを聞知した八重山の島主長田大主（長田は姓にして大主とは島主即ち島司の如きのもの也）は屢々密偵を大浜村に放ち赤蜂の挙動を仔細に偵察させて見ると愈々世上の評判通り反心歴然と確認したのである。が大主は種々考慮疑議の揚句赤蜂と対等に戦端を開くの不利なるを覚り遂には明眸皓歯、黒髪房々たる自己の愛妹クイツバアーを赤蜂に嫁し与へて渠が逆心を押へ傍ら行動を監視せしめ又クイツバアーの姉マイツバアーは縁戚を結んだ関係に仮託して赤蜂の宅に出入りせしめ、渠赤蜂の消息を密告する役割に当てた。然るに赤蜂は大主の為に欺惘されて居たことを知り、又姉妹の出入に油断なく目を瞠りて居ると一日マイツバアーが匆急大主の実家に帰へるのを訝り赤蜂はマイツバアーの後より倉皇追踵し八重山の島主長田大主を殺害すべく短兵急に肉迫したのである。大主は余りの早計に度胸を挫かれ戦ふに由なく、呵呀と慌遽て逃走した。が益々赤蜂に追い巻くられ彼処此処と逃げ廻はり吐息を吻きつつ曠原に遁がれ出づると幸ひ此処には茅葺の番小屋が一軒あるので喘ぎつつ走り入ったが小屋内には雪を欺く様な白髪の老婆が独り居った所へ長田大主は焦躁り或乱ひつつも有体のことを告げ急場の避難を請うた。すると老婆はうち点頭き然ればなり此茅屋狭隘して隠るるに場所なし奈何せんと暫時沈思黙考の末老婆手づから土間を掘りて穴を開け、そして大主を隠

蔽し元の如く土を盛り直して上に大きい竈を築き鉄鍋を懸け火を熾に焚いて湯を沸かす体に紛はした、暴行狼藉、獅子奮進の勢を以て荒れ廻はって来た赤蜂は小屋内に闖入し白髪の老婆を詰問威嚇したが老婆もさるもの平然自若、我れ不関焉の一点張り、赤蜂は止むなく家屋の内外を捜索したが如何にも見当たらない。流石の赤蜂も茫然自失、自問自答して曰く。水の下、火の下、土の下此三つの下に隠れざれば最早此世のものにあらず。自殺か又は溺死したかに相違ないと断定して立ち去ったのである。惟ふに赤蜂は唯三トの法を知って解当の術を知らなかったのであろう。土の中に隠蔽された大主は哮と胸撫で下し匆々老婆に体を述て此処を落ち延び八重山島の西南屋良部崎まで辿り着いたが帰へるには後ろに赤蜂の扼するあり、進むには澎湃たる大海に進退谷まり絶体絶命の窮端に陥って居るのである。

◇芭蕉筏にて海上を走る

八重山の屋良部崎まで毒刃を潜ぐりたる長田大主は航するに船なく進退路を失し焦心懊悩煩悶して愁嘆に沈んで居たが、疑乎と四周を疑視ると蓊鬱たる芭蕉が森々として繁茂して居るのに気が着き是れ屈竟の幸なりと、古今絶無の妙計を案出したのである。渠に神変鬼没の魔力あれば此れにも神機妙変の巧智ありで長田大主は即ち芭蕉材の幹大なるものを伐採して芭蕉の筏を作り之に乗って海上を快駝し対岸なる西表島の海岸古見村に漕ぎ付いて虎口を遁がれたが、急を中山府城なる国王に報告し渠れ赤蜂を討滅しなければ国家の不吉甚大なり。一日も悠々安閑と暮らす時にあらずとあって、古見村の衆を駆り集め急に刳船を造らせ、そして長田大主は恙なく那覇に著港し、中山府城に参内して赤蜂変乱顚末を報告した。之を聞召したる琉球国王は直に令を下し軍船十数艘を擬装せしめ、久米の仲宗根某を将たらしめて八重山島に出兵させたのである。

◇赤蜂の陣法

曩に八重山の島主長田大主を討損なった赤蜂は大主の家屋を横領し八重山本土は我が手に帰したものの猶ほ不安の念に打たれ先づ不時の逆襲に備ふるに内外の砦塞を堅固ならしめ又外寇の侵来すべき要所八重山港口には戦陣を張ったのである。勇悍にして智慮非凡ならざる赤蜂は港口の白砂上には数十間に亘る長小屋を造り建てて戸口を数多開け、そして赤蜂一人で隠見出没して数百の軍兵が小屋内に駐屯し居るやうに見せしめ、又長小屋の前面一列には二斗容程の酒壷を幾十となく並べて各壷の黍の幹を差し立てて夥多の兵が槍弓を携持して居るやうに紛らわせた。曩に那覇港を出航した中山府の軍船は海上隠静の裡に疾駆し来り。八重山港口に近づくと、恁は并も奈何に港口の浜辺には赤蜂の兵数千人官軍を迎撃すべく動めき陣取って居るではないか。海上より之を遠望した官軍は赤蜂の偽計とは露知らず、時は□魂俊巡してゐたが猶ほ船を徐々と進行せしめ疑乎と凝視ると前記の偽計が全然露顕した。官兵一同は赤蜂の怪漢徒らに奸謀術策を翻弄して我軍を悩ますにも程こそあれ、いでや曲者

御参なれと瞬く間に船を寄せ付け突嗟上陸し捕虜にしやうかかつた。勇悍獰猛なる怪漢渠れ赤蜂は神出鬼没奮戦猛闘したが流石勁力の赤蜂も遂には多勢の官兵に蔆々と包囲されて最早網中の魚同然、官軍の兵は皆之を生捕にしやうと争ひ赤蜂目蒐て崩れかかつて来る刹那赤蜂は所謂死物狂で一方を突撃して走り出た。官軍は之を逃すまいと息をも続がせず追い掛けて終には作原山と云ふ所で殺した。そして赤蜂の首級は軍門に梟されたが其髑髏は米五斗を容る程な大頭だったさうだ。赤蜂の死骸は後日になって親戚の者が収容し八重山島万勢岳の麓、石底盛と云ふ周囲十数町余の自然巨巌石下に荘厳なる墳墓を築き今尚ほ縁者の焼香絶えぬのである。赤蜂の容貌怪偉鬼神の如く、大浜の赤蜂が立ち顕れたと云へば泣く幼児も震慄して止むといってをる。渠は又外国人と自称して居たさうだが或マニラ人ではあるまいかと云ふ説もある。

彼の八重山の島主長田大主は赤蜂に追い巻くられて自宅は出奔以来令妹なるマイツバアーが御崎と云ふ権現様に参詣して三七日間断食祈禱し大主の為め将た国家の為に一心を傾注して祈願したが心神疲労の果社前に気絶した途端同村の多田某が之を発見して介抱蘇生せしめて多田某の宅に隠れて居る内長田大主も幾多の兇変難関を抜け出でて赤蜂の暴行を琉球政庁に報告し、併せて十数艘の船と兵士諸友無事海上を往復し赤蜂を掃討して弊害を根絶したのは、全くマイツバアーが心神籠めたる祈願に依ものとして実兄長田大主と共に琉球国王から金の簪を下賜されて王子の位を特に授けられ（今の華族の爵位の如きもの）マイツバアーは尚ほ大阿母なる神官を賜ったが曩にマイツバアーは多田某のお陰にて蘇生したと云ふ所から此大阿母の神官は多田某に譲与し共に其恩典を頒った。又赤蜂に嫁してあったクイツバアーは恩賞に与らなかった。後年に至り長田大主の兄妹三人共生死不明となったが島民は神に化したものと深く信じ八重山島の守護神として祀り子孫今に繁栄して居るさうである。

◇波照間島民の遁走

波照間島は彼の赤蜂が租税を止めさせたので島民一同は赤蜂を神に如くに信服尊敬し豊かなる活計を得たが、赤蜂が八重山島に渡った後香として消息なきに一同膽を潰し人心恟々として安んぜずに居る内に赤蜂は八重山島大浜村の一角に蜂起して官庁に反抗したる罪科により終に殺害されたと云ふことが知れると共に復た課税が復旧徴発されたのであるから納税を厭忌したのか又は赤蜂の後援をなしたと云ふやうな其筋の酷待に出たものか波照間島の村の住民が一夜の間に遁走を実行した。

頃は今を去る二百余年以前の四、五月南風千里を吹き亙る季節であったが例の通り八重山本島を経て琉球藩庁に納入すべき貢租米と粟を数船に積載して何時でも発航し得る様に準備を了へた。深更になると外村の老幼男女総勢二百七十余名は万頼静寂なる暗夜に咄嗟決起して□間準備し置いた船に分乗し夜の明けぬ内に遁走することになった。此時三百名近い総での者各船に夫々乗り込む内一人の女

は炊鍋を忘れたといって急いで鍋を取りに帰った。すると鶏鳴頻りに暁を報じ東天は白く明近くなったので最早や猶予の時間がない若しや内村の者等に発覚されては事容易ならず逡巡躊躇の時でないと鍋を取りに行った女一人を置去りにし南波照間島を指して漕ぎ出したのである。然るに鍋を取りに行った女は急拠駆け付けて来たが船は早や海上の彼方曖昧模糊の間に浮き沈みつ漕ぎ去るのである。浜千鳥をきめ込んだ女は遙か海上を瞻望し携へた鍋を掻き乍ら声を限り泣き叫んだが迚追い着かない。間もなく船体は既に水天髣髴天涯の一際に消え失せた。其当時より今に至るまで鍋を掻き掻き泣いた土地を称して鍋掻と唱えて居る。又遁走民が存在した屋敷の周囲は石の垣柵等の痕跡が今も所々に残存して居るさうである。

◇遁走者の行先地は南波照間島

其後波照間外村遁走民の行先地に就いては不明であったが□五十年を経て波照間島の或る者独木刳舟を漕ぎ海浜で魚を取って居る中俄然颶風吹起り舟と諸共木葉の如く狂瀾怒涛に翻弄されたが運好くも一島嶼に漂着した。測らざりき土地の者と言語相通じ而しで此島は南波照間なることを告げ且曰く。今尚ほ南の船、西の船も往来絶えぬかと聞いたら然うだと答えた。釣人は此処に於て初めて百余年以前に遁走した彼の外村の人々が此島に在住することを知った釣人は逗留二、三後天候静穏に復したので先きの独木刳舟で帰島し、漂流中の一伍一什を物語り此時初めて普く全島民の分明ったと云ふことである。又漂着中の問題に南の船、西の船とは那覇からの船も八重山からの船も矢張り昔日の通り往来して居るかと云ふ話であるさうな。

以上は単に伝説概要を掻い摘んだに過ぎない。詳細い事は八重山島庁の租税関係書類に残って居るさうだが今頃は保存してあるか聊か疑はしい点もあるが何れ更めて紹介する機会もあろうか。余は波照間住民の言語風俗其他種族の系統等に就いては勿論知らないが去る明治八、九年の頃マニラ人が約百名波照間島へ漂着したことがあったが当時マニラ人を現場で見た人の話では、其容貌と云ひ着物の縞模様などと云ひ波照間住民と酷似して居ったさうで或は波照間島民の祖先はマニラ人系統ではあるまいかと云うて居る。

又波照間島と対峙の南波照間と云ふ島は位置風向上から推定すると現時の紅頭嶼ではあるまいかと□く疑われる。余は又紅頭嶼現在の蕃民に就いても詳細を知らないで南波照間島に擬せうとするのは甚だ以て不完全迂愚の誹りを免れないが唯余斯学研究者の参考に資せんとして書き綴ったまでのことである。終りに波照間島民が南波照間島に関して歌つて居る俗謡なるものを掲げて見よう。

波照間のミンヴッガァー
夫婦カイシャ　ミンヴッガー
（はやし）
ホーイーチョゥガー、ニゥバーナゥレ

右の俗謡一首我輩には薩張り訳が分からぬ。加之に現に之を歌って居るものさへ意味不明瞭で不得要領の裏に訳して曰く。南波照間なる島には巨巌が二箇相対峙して海上高く屹立し此岩の中央には一ツ宛の穴が開いて此穴の中から戎克船が自由

に往来して居る。即ち「ミンヴッガァー」とは両方の円い穴の開いて居る二箇の巨巖を夫婦に譬へ夫婦睦しく治まって羨ましいと云ふやうな意味ださうだが、いかがわしいのである。或は紅頭嶼、火焼嶼を此巨巖に見立てのではなかろうか。

尚ほ一言附記したいのは波照間の逃走者は彼の台東の里壟社を開社した祖先をなしたものであるまいかとの感□が湧起する。之れは宮古島民が漂流伝説と相俟ちて二途孰れか判然すると思はるるが亦一方与那国島に於ける舟祭りも連想さるるのである。又波照間島は古来より刺文営業者ないから普通の婦女子には手甲の刺文なく適々刺文の女があるとしても一年一回貢租上納の為め八重山島に渡航する宰領者即ち波照間島各村の頭の妻が同行された序でに刺文をやって帰へる位な少数者であって語を換へて言へば相当の役目を勤めたる妻に限って刺文をやる位であったさうで、之れ亦関係筋があると思ふから茲に附記して置く。

（「台湾日日新報」明治四十二年一月一日）

台湾日日新報と掲載論文及び赤嶺江峰について

『八重山島年来記』に「波照間村之内平田村百姓男女四五拾人程大波照間与申南之島江欠落仕候」等と記された件（くだり）がある。これが「パイパティローマ伝説」を裏付ける歴史資料で「大波照間」は「南波照間」と読み替えられている。そこで「南波照間」は一体、どこだろうか」ということになるが、その所在の追求は明治時代から現在までも論議の的になっている。「台湾日日新報」に掲載された投稿もそのひとつである。

「台湾日日新報」（後に台湾新報）は、日本統治時代の台湾で明治三十一年（一八九八年）に創刊された、最大発行部数を誇る新聞であった。発行社は台湾日日新報社で、台北市にあった。同新聞は八重山、宮古の事蹟に関する記事を掲載することも多く、明治四十二年（一九〇九年）一月一日に発行された「波照間島と紅頭嶼」と題する投稿もその一つである。

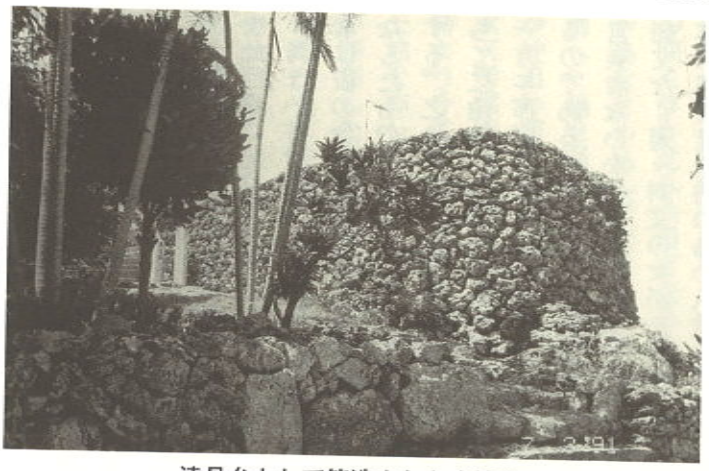
筆者の名前は赤嶺江峰は、雅号と思われる。赤嶺の姓氏から沖縄出身者とも思われるが、今の時点では断定できる資料はない。沖縄出身者の新聞記者では「台湾新報」に田里維章、友寄景清がいたが、「台湾日日新報」の明治期の記者には沖縄出身者は見当たらない。そこで社外の執筆者であった可能性も高い。今後の調査待ちということになる。

なお、同紙は台北市在の台湾中央図書館分館に所蔵されていた新聞資料から浦添市在住の近代沖縄・台湾史研究家の又吉盛清氏によって発掘され、竹富町史編集室に提供されたものである。同資料は、明治期の「南波照間」研究の一端を知る一つである。

《文化財探訪》

―小城盛―

琉球王府時代の古文書『球陽』をみると王府は一六四四年（順治元年）に「烽火の制」を定め、諸島に遠見台を設けて海上監視をさせ、船舶の往来を烽火で中央に緊急連絡させる通信方法を実施した。八重山諸島にも各島に遠見台が築造された。小城盛も遠見台のひとつで当時、重要な通信の役割を果たした。波照間島、西表西部、東部から各遠見台を経て受け継がれた火は竹富島を経由して全て石垣島にある蔵元へと持たらされた。



遠見台として築造された小城盛

遠見台は飛舟、早馬、早遣等とともに蔵元への通信システムの中に組み込まれ設置された。「烽火の制」施行の当時や以降も含めて八重山近海には様々な舟が行き交い、王府は船舶監視と同時に交通通信の円滑化を図る必要があった。船舶を確認すると烽火を上げるが、立火は船種により異なった。地船、唐船の場合は二つ、大和船で三つ、外国船では四つという具合だった。昼間は立煙、夜間は立火で信号を送った。遠見台には遠見番が配置され、重要な役務を担った。

小城盛はクースクムイと呼ばれ、島最大の祭祀・種子取祭が行なわれる世持御嶽の北側に隣接する。琉球王府時代には近くに村番所があり、世持御嶽は村番所の火を神を祀っていた。小城盛はンブフルと同様な性格を有するが、村番所と近接する位置関係が重要である。地形は平坦ではなく基底部分は盛り上がっている。そこに琉球石灰岩を積み上げて遠見台としている。

遠見台は通常、渦巻き状だが小城盛は台形状を成している。高さは北面約四㍍東面約四・四㍍で南面に階段が設けられている。広さは東西約十一㍍、南北約四・四㍍。上面には円石に十二支を刻み込んだ方位石がある。遠見番が連日、上り四海を監視していたが、日露戦争（一九〇四～五年）時にはバルチック艦隊が通過するということで、若者が海上をチェックしたといわれる。

小城盛に登ると北方の石垣島の山並を見渡せるが小浜島、新城島、黒島は樹木に遮断されて全く見ることができない。「烽火の制」以前から小城盛は遠見する場所だった可能性が高い、とするが一六四四年段階に築かれた遠見台とするのは速断過ぎるとの見方がある。『八重山島年来記』の記述から一六九四年段階以降であろうとする。

（通事孝作）

渡し舟での川渡り。人もオートバイも運ぶ

《写真にみるわが町》

―浦内川の渡し舟―

西表島西部に注ぐ浦内川は、県内で最長を誇り河口にはマングローブ林が広がり中、上流には亜熱帯原生林が迫る。雄大な自然は観光客に人気があり連日、遊覧ボートが観光客を乗せ下流、中流間を往来している。河川は上原地区と西表地区を分け、交通の要衝だが橋梁のない時代に住民は行き来に難渋を極めた。

架橋以前に活躍したのが渡し舟だった。舟は人々の〝足〟としてフル稼働し、要望に応えていた。渡し場は上原地区側に設けられ、対岸の西表地区側から行くには大声で船頭を呼び渡るという具合だった。河口幅は三百㍍以上あり、渡し舟はゆっくりと川面を進んだ。河口水面は、潮の干潮により変化はあるが、かなり広大である。流れもあり渡し舟を目的地に着けるには熟練を要した。渡し舟は人間だけではなく、様々な荷物があり時にはオートバイも。舟頭は花田嘉市さんで、巧みに舟棹を操り河川を往復した。

西表西部、北部地区の人々は渡し舟を利用しながらも架橋建設を望んだ。町当局は波状的に米国民政府、琉球政府に要請活動を繰り返し、住民の夢を実現させた。渡し舟は十有余年、多くの人たちの暮らしに深く関わっていたが一九七〇年（昭和四十五年）三月、浦内橋が建設されたことで〝現役〟を退いた。橋梁の近くに建つ「浦内橋の碑」には渡し舟往来の苦労と西表島開発を刻む。（通事孝作）

《新聞で知る町の今昔》

―八重山分村問題―

明治政府は沖縄に対し廃藩置県以後、旧慣温存政策をとり、琉球王府時代の施策を踏襲してきたが、明治三十年代の入ると様々な政策を断行してきた。

●八重山郡分村　昨日縣令第五号を以て八重山郡八重山を廢して更に字登野、大川、石垣、新川、宮良、川平、桴梅、崎枝、の區域を以て石垣村を設き字大濱、真栄里、平得、宮良、白保盛山、桃里、伊原間、平久保、の區域を以て大濱村を設き字竹富、黒島、新城、古見、西表、小濱、鳩間、上原西表、鳩山、波照間、與那の區域を以て竹富村を設き字與那國の區域を以て與那國村を設く官報布せり

「沖縄毎日新聞」大正３年４月１日付け記事

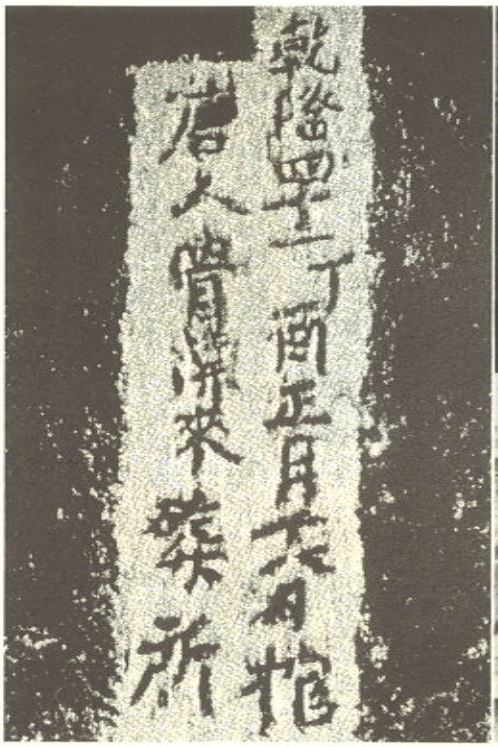
主要な施策は土地整理事業と地方制度改革に集約できる。『沖縄県間切島規程』が一八九九年（明治三十二年）に施行され、一九〇八年（同四十一年）には『沖縄県島嶼町村制』が実施となり、間切制度が廃止された。それに伴い八重山では一郡一村の八重山村が誕生し、初代村長には上江洲由恭が就任した。しかし隣の宮古郡が平良、城辺、下地、伊良部の四村だった中で、多くの島じまを抱え行政区域も広い八重山を一村としたことに当初から疑問視する声があった。

八重山分村問題が発生したのが一九〇九年（同四十二）年のこと。「沖縄毎日新聞」が同年十一月三日付け紙面で「八重山の生命と分村問題」と題する当間重慎の署名入り記事を掲載している。「沖縄毎日新聞」は一九〇八年（同四十一年）に那覇、首里、国頭、中頭、島尻の代表者が集まり那覇で創刊された新聞。当間が社長で「平民派の機関紙」と言われた。

「八重山の生命と分村問題」は記す。「今日既に島民は分村を希望し村会議員一人を除く外に之を可となし目下其手続きを進行せしめつつあり。一村のみにては式たりの事務に逐はるるのみにて他に考の及ふなく交通不便は益々庁吏村吏の思想沈滞し亳も活方面の開拓に注意せす殆んど自然の成行に放任せるの感あらす。斯る活力沈滞の現状をして活動せしむるには分村以て村吏の競争心を勃起せしめ四箇士族部落を離れて百姓部落の中心点を成さしめさるはからす」とある。

分村問題は翌年に入り「沖縄毎日新聞」が大々的に「八重山村は石垣、大浜、竹富、与那国の四村に分村すべき」とキャンペーンを展開し、世論を喚起している。具体的には四村の戸数、人口、地租額等を詳細に分析している。と同時に分村を臨時村会で全会一致で決議した請願書も紹介する。しかし「琉球新報」は、ほとんど分村問題を取り扱っていない。

八重山村は一九一四年（大正三年）四月一日、石垣、大浜、竹富、与那国の四村に分村した。人口は石垣村一万八百八十八人、大浜村四千三百九十五人、竹富村六千二百七十四人、与那国村三千百六十四人で、竹富村の初代村長には豊川善佐が就任した。村役場は字竹富四〇四番地に決った。一九三八年（昭和十三年）には石垣町に移転した。（通事孝作）



碑文

岩蔭に建つ墓碑

小浜島の唐人墓碑

建立年　乾隆四十二年（一七七七年）
法　量　タテ六三㌢　ヨコ三六・五㌢
石　質　サンゴ石灰岩

【碑文】

乾隆四十二丁酉正月十八日棺
唐人骨漂来葬所

【解説】

小浜島には古い時代に石垣島へ向かう唐船（中国船）が難波し島人が遺体を集めて葬った、という伝承が残っている。石碑の碑文から墓所を示していることが分かる。墓碑のある場所は、島の北側で海岸線から約十㍍ほど内陸へ入る。付近一帯はジャングルに覆われており、墓所は岩陰を利用して設けられている。墳墓の形態は岩陰葬を彷彿とさせる。岩の前面は半径状に石垣が積まれている。島の古老によると、十数年前までは骨片が散在していたといわれる。しかし現在は全く残っておらず、往時の面影はない。墓碑文から約二百二十年前に建立されたことは判断できるが、どのような人が何人、葬られているかは分からない。船の難波といわれるが、その理由も知ることができない。（通事孝作）

県地域史協議会研修会

―伊江島で開く―

「北部の戦中・戦後を考える」をテーマにした一九九三年度宿泊研修会が、昨年十月二十七日から二十九日までの三日間、伊江島村立中央公民館で開かれ、伊江島を中心とした沖縄戦の実態について研修を深めた。

伊江島での沖地協研修会

研修会初日は、反戦平和資料館を見学した。そこでは同館を運営する阿波根昌鴻さん、謝花悦子さんが反戦平和の尊さを強調するとともに、資料館建設の動機を語った。館内には、沖縄戦を知る戦時中の薬莢、鉄カブト、軍靴、水筒等が展示されている。

研修会二日目は地域史研修に入り、伊江村教育長代理が歓迎の言葉を述べ、恩河尚・沖地協代表があいさつした。報告は中村誠司さん（名護市教育委員会）が「北部の沖縄戦」と題し行なった。三日目は戦跡めぐり等が行なわれた。

―糸満市で開催―

「地域史におけるパソコン利用について」をテーマにした一九九三年度第一回研修会が昨年八月十日、糸満市社会福祉センターで開かれた。地域史編集にとってパソコンは不可欠の情報機器で、県内市町村史編集室では導入が増えている。研修会ではパソコンを使用しての新聞集成、年表作成等についての報告があり、情報交換が行なわれた。

研修会は、最初に恩河尚代表のあいさつ、糸満市からの歓迎の言葉があった。引き続き糸満市の金城善さんが「パソコン利用の方向性について」と題し報告。内容は一九八八年からの継続事業である『地域史資料叢書』の編集、刊行を取り上げながら①地域史資料のＯＡ（オフィス・オートメーション）化②地域史資料の共同化、共有化を強調し「パソコンを駆使して資料を共有することができれば、地域編集は円滑に運ぶだろう」とまとめた。

「パソコン利用のあれこれ」については具志川市史、沖縄市史、西原町史、石川市史、糸満市史が行なった。報告内容は新聞集成、戦争関係資料の整理、図書の分類等のパソコン使用方法が示された。「パソコン利用の実際」に関しては読谷村史の泉川良彦さんが報告した。

竹富町史第十二巻資料編　戦争体験記録の編集理念

本戦争体験記録は、竹富町史編集基本構想及び編集計画等を踏まえ、竹富町史第十二巻資料編　戦争体験記録として編纂する。

本町の第二次基本構想の中で謳われている将来像「日本最南端の大自然と文化の町－自然・文化・未来」の中、文化については、文化の息づくまちづくり―伝統と歴史を背景に生まれた、豊かな文化をまもり、さらに新しい時代の潮流に対応した創造的な町を建設していくためには、やはり歴史に対する明確な判断が重要になってくる。私達は先人が築き、あるいは体験してきた歴史を考察していくことによって、現在を正しく認識することができ、未来へのわが竹富町のあるべき姿を展望することができる。

わが国における戦争の歴史は、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争、いわゆる十五年戦争の集結に至るまでを中心としている。本編は、戦後復興を視野に入れた戦争体験者（戦前、戦中、戦後）の聞き取り調査、体験者自身の執筆、戦災実態調査、戦後の復興記録を収録する。

特に、太平洋戦争における沖縄戦は、沖縄の歴史上、日本全体の歴史の上から見ても大きな悲惨な出来事であり、人命と財産を奪い人々はかつてない不幸な体験をした。

しかし、激烈な地上戦が展開された沖縄本島とは異なり、本町（八重山）では地上における直接の大戦はなかったものの米、英軍機による空襲をはじめ地上戦に備えて特に西表島に「舟浮要塞」（昭和十六年）が建設され、重要な軍事上の拠点と位置づけられ住民の郷土防衛隊をはじめ駐屯軍と徴用、軍雇傭人、供出、台湾に及ぶ島内外への疎開、山岳地への遭難、マラリア猖獗、徴兵と出征の戦闘参加など色々なことが起こり、その間住民は社会治安の不安定と食糧難の中にあって治安維持安定に努め、更に産業、教育、文化の復興にあらゆる苦難を克服してきた。

戦争が集結してからすでに四十九年になり半世紀になろうとしているなかで、当時の戦争体験者も年々高齢化し、その聞き取り調査は急を要し、なかにはすでに亡くなられた方や、過疎化が進行する中で転出した方も少なくありません。

この時にあたって町民の「戦前・戦中・戦後」体験記録を速やかに集成し正しく記録し、戦史の証として後世に伝えていくことは大切なことである。したがって別紙編集要項をステップに、戦争体験記録の基本目標、指針等、戦前、戦中、戦後体験収集項目、戦後復興体験記録収集項目、体験記録募集要領に基づき戦災実態調査等も踏まえ編纂作業を進める。

戦災実態調査記入要領

1 この実態調査は「竹富町史第十二巻資料編戦争体験記録」の編集に供する調査である。

2 調査対象者（世帯）は戦前、戦中に竹富町内に住んでいた者（世帯）、現在居住している町民で戦争体験された方及び沖縄県内、本土在住の竹富町出身で戦争他県された方（郷友会）等。

3 調査対象期間は昭和十六年八月（船浮要塞建設着手）から昭和二十年八月（終戦）までとする。但し疎開、移民、出稼ぎ、部隊配属等の帰還、引き揚げ等についてはこの限りでない。

4 調査者は個人のプライバシーに関わることは厳守すること。

Ⅰ 記入要領

(1)地図番号　地図を見て記入する。

(2)家族数　調査票中の家族氏名の合計数を記入する。

(3)世帯数　昭和十九年当時の本籍（住所、氏名）を記入する。

(4)話者　この実態調査に対応された方と現住所を記入する。

(5)家族氏名　昭和十九年当時、同居していた全家族（徴用、兵隊、疎開等）を記入する。

(6)年齢　昭和十九年当時の年齢を記入する。

(7)性別　男・女を記入する。

(8)続柄　当時の戸主との続柄を記入する。

(9)生年月日　生れた年月日を記入する。

(10)職業　当時の職業を記入する。

(11)土地利用　土地の接収（田、畑、屋敷、原野、その他）徴用（軍需工場、強制動員等）を記入する。

Ⅱ 一般住民体験

(1)生存　生存者は○印、戦没者は×、戦死なのかどうか判断できない者は△印を記す。

(2)負傷　右足切断、左眼失明等のように具体的に記入する。

(4)病気　罹った病名を記入する。（例：マラリア）

(4)死亡　死亡した年月日、場所、原因（日本兵あるいは米兵による殺害、集団自決、栄養失調等）を記入する。

(5)疎開避難　県外への疎開や西表への避難の際、どんな物を持参してどんな状況（船、馬車、徒歩か老人、病人等の弱者はどのようにしたか）だったのかを具体的に疎開、避難等の欄に記入する。

Ⅲ 軍人、軍属、準軍属体験

(1)軍人　所属していた部隊名、階級等を記す。配属替えや二度以上召集された場合等は具体的に「部隊配属

等」の欄に記入する。

(2)防衛隊　所属していた隊名や召集配置場所等を記入する。

(4)学徒隊　学校名及び所属していた隊名や召集、配置場所等を記す。

(4)その他　炊事、看護等を具体的に記す。その際、体験は「特記事項」欄に記入する。

(5)招集　時期、期間等を記入する。

(6)病気負傷　罹った病名を記入する。（例：マラリア）負傷は右上腕切断・右眼失明等と具体的に記入する。

(7)戦死　年月日、場所（はっきりしない場合は南方、台湾、石垣、沖縄本島等のように記入してもよい）原因（艦砲や爆弾等による負傷、戦病死）を記入する。

(8)捕虜　捕虜となった年月日、場所、収容所等を記入する。

(9)終戦地　終戦を知った場所。

Ⅳ 財産等の徴用、被害状況

(1)家屋の種類　瓦ぶきか、茅ぶきか該当するものを○で囲む。

(2)家屋の被害状況　各々の欄に全壊×半壊△、残家○印で囲む。

(3)家畜の被害（供出）状況　供出した家畜の数及びその他の被害数を記入する。

(4)農作物の被害（供出）状況　供出した数量及びその他被害の数量を記入する。

(5)船舶　貸客・漁船の被害状況沈没の隻数を記入する。

Ⅴ 具体的記入欄

※疎開避難等　疎開や避難等の生年月日経路等を具体的に記入する。

※部隊配属経過等　「軍人、軍属、準軍等属体験」の欄で軍人等の経路や配置替え二度以上召集された場合に記入する。

※特記事項等　調査項目の内容を含め特異な体験又は詳細な調査が必要と思われる事項等を記す。また調査の際、欄内に記入できなかった事項や資料（軍隊手帳、愛国貯金通帳等）を持っている等の事情を記入する。さらに戦争体験記録の執筆及び聞き取り調査の可否についても記入する。

太平洋戦争　竹富町戦災実態調査票（記入例）

No.

①

(1) 地図番号、屋号		(2) 家族数	(3) 世帯数	本籍	竹富町字竹富3000番地	(4) 体験者	現住所	那覇市久米1丁目2番地
番号		8		住所	同上		氏名	大浜正一
屋号				氏名	大浜一郎		電話	098-866-2285

調査年月日	平成　年　月　日
調査地区	竹富島
記入者氏名	大浜正一

番号	(5) 家族氏名（現姓）	(6) 年令	(7) 性別	(8) 続柄	(9) 生年月日	(10) 職業	(11) 徴用土地使用等	Ⅱ 一般住民体験 (1) 生存	(2) 負傷	(3) 病気	(4) 死亡 年月日	場所	原因	(5) 疎開避難状況等	Ⅲ 軍人・軍属・準軍属体験 (1) 兵隊	(2) 防衛隊	(3) 学徒隊	(4) その他	(5) 召集時期	(6) 病気負傷	(7) 戦死 年月日	場所	原因	(8) 捕虜 年月日	場所	(9) 終戦地
1	大浜一郎（　）	51	男	戸主	Ⓜ T.S 27年10月5日	農業	竹富								大石隊				S.17 5月		S.20 1.5	沖縄 本島	爆弾			
2	〃 ツヤ（　）	50	女	妻	Ⓜ T.S 28年11月23日	家事	第十五番地			マラリア	S.20、3.10	西表島	マラリア													
3	〃 正一（　）	31	男	長男	M.T.S 3年5月15日	農業										小隊			S.19 10月							西表内離
4	〃 花子（　）	28	女	長女	M.T.S 6年3月11日			○																		
5	〃 正夫（　）	17	男	二男	M.T.S 3年6月7日		第8番地		右足切断								高良隊		S.20 5月	負傷						石垣自保、療養所
6	〃 好子（　）	27	女	次男の妻	M.T.S 7年3月2日		大石隊使用																			
7	〃 英二（　）	7	男	次男の長男	M.T.S 13年7月25日			○																		
8	〃 友子（　）	4	女	長男の次女	M.T.S 16年1月10日					栄養失調	S.20 10.26	竹富島	栄養失調													

Ⅳ

(1) 家屋の種類 瓦ぶき	茅ぶき	(2) 家屋の被害状況 母屋	納屋	畜舎	(3) 家畜の（供出）被害状況 牛	馬	山羊	鶏	その他	(4) 農作物等（供出）被害状況 米	イモ	粟	麦	野菜	木材	その他	(5) 船舶 貨客	漁船
	○	×	△	○	2	1	6	10		10俵	5斤	1石	石 0.5	大根 100本	板材 30本		1	

※ 体験記録事項

- 戦争体験記録の（原稿）執筆 〔可・否〕 大浜正一
- 戦争体験記録、聞き取り調査 〔可・否〕

Ⅴ

* 疎開避難等　昭和17年11月5日～昭和20年8月10日まで西表島（西表、南風見田、伊武田）へサバニ漁船等で渡り避難する。

* 部隊配属経過等（戸主）一郎は、昭和12年10月20日日中戦争（支那事変）出征、中国へ。昭和15年3月復員する。

* 特記事項等（二男）正夫は、昭和20年5月8日、自保療養所で爆撃を受け右足切断する。（高良隊・陸）
- 戦時公債・郵便保険証・軍隊手帳等保存

竹富町史編集室

戦時・戦後体験記録の募集要項

一、募集対象者

イ、戦前の竹富村民及び現在の竹富町民。

ロ、竹富町民で戦争を体験されたことのある方。

ハ、沖縄県内及び本土在住の竹富町出身者。

ニ、戦後復興で（生活等）竹富町内で体験された方。

ホ、当時、竹富町に駐屯していた軍隊等。

二、記録の対象期間

一九三一年（昭和六年）満洲事変～一九七二年（昭和四七年）五月一五日本土復帰まで。

三、原稿の枚数

四百字詰め原稿用紙の五枚から二〇枚程度

四、原稿の締切

平成六年十一月末日までとする。

五、収録決定は、竹富町史編集委員会が行います。

六、収録の場合添削することがあります。

七、収録された方には冊子（体験記録）編集取材協力記念タオルを進呈します。

八、提出した原稿は、返却いたしません。

九、原稿には、住所、氏名、現在の年齢、昭和十九年当時の年齢生年月日、職業もお書きの上、左記竹富町史編集室あてにお送り下さい。

十、聞き書きをしてもらいたい方も左記へご連絡下さい。

連絡先

〒九〇七

沖縄県石垣市字大川一〇番地

竹富町役場（町史編集室）

☎〇九八〇八―二―九九八五

戦争体験記録の意義

太平洋戦争が終結して五十年目に入りました。当時、若者だった人々も時の流れの中で高齢者となり、戦争体験者の老齢化進んでいます。そのような中で戦前の社会を浮き彫りにし、戦争の実相を確実に掌握する視点から体験者の証言を記録に止め、戦争資料として残す必要があります。

戦争体験者の証言を記録保存することは歴史の発掘でもあり、竹富町史編集にとっても極めて重要なことです。戦後世代が増え、戦争体験の風化が懸念されているが、戦争を直視し、恒久平和を願う立場から、戦争体験記録を速やかに集成し、戦史の証として後世に伝承していくことは大切なことと考えます。

八重山は沖縄本島のように米軍の上陸や戦闘はなかったが、激しい空襲、強制疎開によるマラリア禍が猖獗を極めました。戦争の歴史の一ページとして記録することは意義のあることです。

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名
山城善三	沖縄県史第2巻
〃	沖縄県史第3巻
〃	沖縄県史第4巻
〃	沖縄県史第5巻
〃	沖縄県史第6巻
〃	沖縄県史第7巻
〃	沖縄県史第8巻
〃	沖縄県史第9巻
〃	沖縄県史第10巻
〃	沖縄県史第11巻
〃	沖縄県史第12巻
〃	沖縄県史第13巻
〃	沖縄県史第14巻
〃	沖縄県史第15巻
〃	沖縄県史第16巻
山城善三	沖縄県史第17巻
〃	沖縄県史第18巻
〃	沖縄県史第19巻
〃	沖縄県史第20巻
〃	沖縄県史第21巻
〃	沖縄県史第22巻
〃	沖縄県史第23巻
〃	沖縄県青年団史
〃	10分でわかる英語
〃	木綿以前のこと
〃	沖縄に君臨した平家
〃	琉歌物語
〃	沖縄の民謡　歌詞と解説
〃	沖縄県史料　近代1
〃	沖縄県史料　近代2
〃	沖縄県史料　近代3
〃	沖縄県史料　前近代6
〃	那覇市史　第1巻1
〃	那覇市史　第1巻2
〃	那覇市史　第1巻3
〃	那覇市史　第1巻5
〃	那覇市史　第1巻5　別冊
那覇市長	那覇市史　資料編　第1巻10

山城善三	那覇市史 第2巻中の1 資料編
〃	那覇市史 第2巻中の2 資料編
〃	那覇市史 第2巻中の3 資料編
〃	那覇市史 第2巻中の4 資料編
〃	那覇市史 第2巻中の5 資料編
〃	那覇市史 第2巻中の6 資料編
〃	那覇市史 第2巻中の7 資料編
〃	那覇市史 第2巻の上 資料編
〃	那覇市史 第2巻の下 資料編
〃	那覇市史 第3巻3 資料編
〃	南風原村史
〃	東風平村史
〃	北中城村
〃	具志頭村史
〃	宜野座村誌
宜野座村役場	久米島具志川村史
具志川村役場	伊豆味誌
山城善三	南大島村史
〃	琉球史料 第1集
〃	琉球史料 第2集
〃	琉球史料 第3集
〃	琉球史料 第4集
〃	琉球史料 第5集

山城善三	琉球史料 第6集
〃	琉球史料 第7集
〃	琉球史料 第8集
〃	琉球史料 第9集
〃	琉球史料 第10集
〃	訳注 球陽全
〃	沖縄県国頭郡志
〃	北谷村誌
〃	沖縄県国頭郡教育委員会
〃	伊是名村誌
〃	具志堅誌
〃	真和志市誌
〃	島尻郡誌
〃	羽地村誌
〃	方言覺書
〃	南方文化の建設へ
〃	琉球文学
〃	21世紀への海洋開発
〃	流氷への旅
〃	神と村—沖縄の村落
〃	久米島史話
〃	古代沖縄の姿
〃	わが遺言

購入図書紹介

多数の書籍を購入していますが紙面の都合上その一部を紹介します。

編集者名	図書名	発行所名
大田昌秀	沖縄の民衆意識	新泉社
東恩納寛惇	六輸衍義	国民教育社刊
竹原孫恭	城間船中国漂流顛末	三栄社
宮城栄昌	沖縄女性史	沖縄タイムス社
大田昌秀	近代沖縄の政治構造	勁草書房
山里景春	新沖縄文学	沖縄タイムス社
横山學	琉球所属問題関係資料 第一巻 琉球一件	本邦書籍
横山學	琉球所属問題関係資料 第二巻 琉球出張日誌	本邦書籍
横山學	琉球所属問題関係資料 第三巻 グラント将軍	本邦書籍
横山學	琉球所属問題関係資料 第四巻 松田道之琉球事件	本邦書籍
横山學	琉球所属問題関係資料 第五巻	本邦書籍
横山學	琉球所属問題関係資料 第六巻 琉球処分上 中	本邦書籍
横山學	琉球所属問題関係資料 第七巻 琉球処分 下	本邦書籍
横山學	琉球所属問題関係資料 第八巻 琉球所属問題	本邦書籍
畠山茲	日本庶民生活史料集成	三一書房
沖縄県教育委員会	沖縄県史料 戦後一	沖縄県教育委員会
沖縄県教育委員会	沖縄県史料 戦後二	沖縄県教育委員会
沖縄県教育委員会	沖縄県史料 近代四	沖縄県教育委員会
小葉田淳	中世南島通交貿易史の研究	臨川書店
沖縄県教育委員会	八重山嶋規模帳	沖縄県教育委員会

沖縄県教育委員会	琉球、中国、日本、朝鮮年代対照表	沖縄県教育委員会	沖縄タイムス社	
沖縄女性を考える会	沖縄女たちの昭和	那覇市首里公民館	沖縄タイムス社	
琉球政府	琉球史料 第一集	那覇出版社	沖縄タイムス社	沖縄美術全集 1
琉球政府	琉球史料 第二集	那覇出版社	沖縄タイムス社	沖縄美術全集 2
琉球政府	琉球史料 第三集	那覇出版社	沖縄タイムス社	沖縄美術全集 3
琉球政府	琉球史料 第四集	那覇出版社	沖縄タイムス社	沖縄美術全集 4
琉球政府	琉球史料 第五集	那覇出版社	沖縄タイムス社	沖縄美術全集 5
琉球政府	琉球史料 第六集	那覇出版社	沖縄タイムス社	沖縄美術全集 6
琉球政府	琉球史料 第七集	那覇出版社	宮城文	八重山生活誌
琉球政府	琉球史料 第八集	那覇出版社	宮良泰平	八重山方言の素性
琉球政府	琉球史料 第九集	那覇出版社	多和田真助	門中風土記
琉球政府	琉球史料 第十集	那覇出版社	牧野清	八重山のお嶽
亀井秀一	牧野清	新八重山歴史	宮良泰平	沖縄タイムス社
竹富島の歴史と民俗	角川書店	牧野清	あ～まん企画	沖縄タイムス社

業務日誌

■一九九三年（平成五年）

十月一日
新聞集成収録記事添削目録作成業務継続。

十月八日
町史編集室内定例会議、十月業務予定検討。

十月二十日
国立歴史民俗博物館特定地理研究会参加（職員一名、於石垣市）。

十月二六日
・喜舎場家文書、古新聞（八重山関係）の原本所蔵者喜舎場氏と（琉大で）複製、転載内諾の交渉をする。
・沖縄県地域史協議会宿泊研修会、反戦平和資料館見学及び館主との語らい、北部の沖縄戦について（報告）、史跡巡見職員二名参加（二九日まで、於伊江村）。

十一月一日
新聞集成収録記事添削項目等、作成業務継続。

十一月二日
町史編集室内定例会議、十一月業務予定検討。

十一月四日
第七回竹富町史編集委員会開催。議題、(1)新聞集成編集（構成等）方法について、(2)戦争体験記録及び戦災実態調査要領について、(3)その他。

十一月十五日
竹富町史第十一巻資料編新聞集成Ⅰ印刷製本入札実施。
南風原町字兼城五七七番地在、グローバル企画印刷株式会社が落札。

十二月一日
宮良當壮博士生誕百年記念顕彰碑除幕式参列（職員一名、於石垣市）。

十二月三日
竹富町史第十一巻資料編新聞集成Ⅰ、印刷製本契約する。（グローバル企画印刷株式会社）。

十二月六日
町史編集室内定例会議、十二月業務予定検討。

十二月八日
新聞集成Ⅰの明治・大正期年次解説、編集委員二氏へ執筆依頼する。

十二月九日
竹富町史だより第四号発刊、町内全世帯へ配布。

十二月十五日
明治・大正期の新聞にみる竹富町関係略年表及び索引づくり作業開始。

十二月二十一日
・一九九三年第十四回沖縄タイムス出版文化賞に、竹富町史

別巻三写真集「ぱいぬしまじま」が特別賞を受賞。於那覇（沖縄タイムスホール）授賞式に職員二名出席。
・新聞集成印刷製本依頼会社、グローバル企画へ訪問し、進捗状況の掌握及びその他資料収集（二十二日まで）。

■一九九四年（平成六年）

一月五日
新聞集成Ⅰの索引づくり及び略年表の作成業務継続。

一月七日
・町史編集室内会議、一月業務内容予定検討。
・新聞集成Ⅰ、印刷第一回校正開始。

一月十日
新聞集成総説原稿の執筆。

一月二十日
行政文書分類整理編纂保存業務委託（南山舎）。

一月十七日
パソコンによる索引の打込み作業開始。

二月一日
・新聞集成Ⅰ、第一回校正業務及び索引パソコン打込み作業継続。
・戦争体験記録（体験者へ）原稿執筆依頼する（沖縄本島在町郷友会出身者、黒島・仲盛氏）。

二月三日
町史編集室定例会議、二月業務予定検討。

二月二十一日
新聞集成Ⅰ、第二回校正作業開始。

三月一日
新聞集成第二回校正作業継続。

三月三日
書籍購入、教科書としての『六輸衍義』外一五冊蔵書。

三月四日
町史編集室内定例会議、三月業務予定検討。

編集後記

◆『竹富町史だより』第五号を発刊しました。町史だよりは、町史編集の取り組み状況を町民をはじめ、関係機関に知ってもらうと同時に町の歴史、文化を紹介する場でもあります。それは広報誌的な役割もありますが、単にそれに止まらず町の歴史、文化の掘り起こしも微力ながら紹介しております。

◆今号は写真集『ぱいぬしまじま』が第十四回沖縄タイムス出版文化賞の特別賞に輝いた朗報をトップに扱いました。写真集が出版文化賞を受賞したことに責任の重大さを感じます。同賞を〝激励賞〟と肝に命じ、町史編集に取り組みます。

◆今号では新聞資料も取り上げました。「波照間島と紅頭嶼」と題する「台湾日日新報」の投稿記事です。論点では〝南波照間〟の所在を追求しています。今年は戦争体験記録調査を行ないます。

竹富町史だより　第５号

平成６年３月31日　発行

編集発行　竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎09808－2－9985

印刷　八島印刷